

園芸産地での水稲多収品種の導入支援 (part2)

■ 豊南地域水稲生産者 ■

(西讃農業改良普及センター 宮崎勝、山田浩三、山地優徳、○嶋田真耶、池田晃一郎)

●対象の概要

豊南地域は、県内でも有数のレタスやブロッコリー、葉ネギ等の露地野菜の栽培が盛んな園芸産地である。一方、水稲は野菜との二毛作が多く、連作障害回避のための「野菜の裏作」と感じている生産者もいる。

また、同地域は後作の野菜作付のため、早生品種が好まれる地域性があり、「コシヒカリ」と「あきたこまち」の2品種で75%を占める偏った品種構成となっていた。

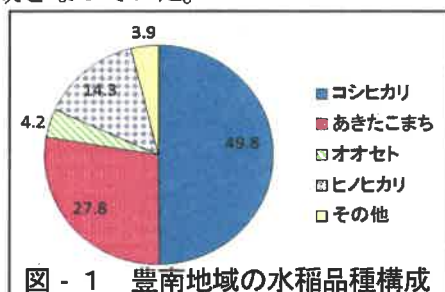


図 - 1 豊南地域の水稲品種構成

●課題を取り上げた理由

「あきたこまち」は、早期の「コシヒカリ」に次ぐ短期の作型として、また倒伏に強い品種として平成17年から導入され、長年栽培されてきた。しかし、近年、異常気象が続く中、倒伏を心配した減肥栽培や早期落水により、収量や品質の低下が課題となっていた。

また、カントリーエレベーター（以下、CE）での早生品種の荷受けの競合も課題になっており、荷受け時の混雑や異品種混入のリスクが懸念されていた。

そこで、「あきたこまち」に替わる品種の探索のため他県の状況を調査する中で、広島県などの近県で奨励品種に採用されていた「あきさかり」に注目し、平成27年から試験栽培を同地域独自で開始した。

その後、3年間の検討を経て、平成30年度から本格導入となった。

●普及活動の経過

本格導入後の取組についてまとめる。

1 基準田の設置・巡回指導で「見える化」

J A豊南地区営農センターの支店単位（8か所）に基準田を設置し、生育ステージごとに巡回・調査を行い、栽培管理指導内容を看板に記入することで栽培技術の「見える化」を図った。



栽培基準田と看板

2 栽培講習会の開催と豊南独自のしおり作成

試験栽培時と同様に、生育中期（6月）と次年度の作付前（1月）に栽培講習会を開催した。「あきさかり」の品種特性が最大限発揮できるように、植付本数の適正化、適正な施肥と適切な水管理の徹底を呼びかけるとともに、豊南地域独自の栽培マニュアル『「あきさかり」栽培のしおり』を作成・配布した。

そのほか、基準田がある4地域において、穂肥診断の実技講習会を開催し、幼穂の確認方法や穂肥の時期と量の判定方法を講習し、単収向上のポイントを周知した。



3 「あきさかり」専用一発肥料の開発・検討

省力化を目的とした「あきさかり」専用一発肥料の試験を実施し、生育状況・収量等について従来の早期のツーショット肥料との比較を行った。従来の「あきたこまち」専用一発肥料「これっさり」に改良を加え、「あきさかり」の生育期間にあった肥料試験を平成29年度に引き続き営農センターや肥料メーカーとともに検討した。

4 奨励品種決定調査現地試験の実施

全県的に試験栽培の動きが拡大する中、本年度から奨励品種への採用に向けて現地試験を開始した。「はえぬき」を標準品種として生育状況、収量性等について比較した。

表一 1 栽培基準田の調査結果

No.	田植日 (月日)	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	株間 (cm)	稈長 (cm)	穂数 (本/株)	精玄米量 (kg/10a)	外観 品質
1	5.26	8.2	9.12	23.8	84.3	26.2 367	727	2等下
2	5.26	8.4	9.10	23.8	81.2	33.2 465	604	2等下
3	5.28	8.5	9.11	28.8	74.2	25.2 294	560	2等上
4	6.3	8.4	9.7	26.3	64.2	25.2 320	435	3等上
5	6.6	8.8	9.12	23.8	84.3	25.0 350	569	3等中
6	6.7	8.10	9.14	22.5	69.5	30.8 456	402	2等下
7	6.8	8.10	9.14	21.3	71.3	20.1 316	451	2等中
8	6.19	8.15	9.21	27.5	72.0	36.9 447	572	3等中
平均				24.7 やや広い	73.7 短稈	27.8 377	540 多収	2等下 充実度

●普及活動の成果

1 「あきさかり」の特性把握と地域への波及

基準田の調査結果では、平均稈長が73.7cmと短稈で、成熟期は遅く、収量はほ場によりばらつきがあるものの、平均で540kg/10aと耐倒伏性、多収性を確認できた。また、近隣の「あきさかり」生産者の参考となるよう栽培管理指導内容を看板に記入し、栽培技術の「見える化」と生育状況を確認することによる「安心」を提供した。

2 「あきさかり」の特性にあった栽培法の周知

豊南地域では、水稻収穫後、野菜の“地ごしらえ”を急ぐ傾向があり、そのため成熟期前に早めに落水する生産者が多い。そこで、「あきさかり」の多収性を発揮できるよう適切な水管理による登熟向上を指導するとともに、穂肥診断講習により生育状況に応じた穂肥の施用を呼びかけた。その結果、CE荷受けの単収換算は、492kg/10aと好成績であった。

また、米の消費拡大と認知度向上を目的として、豊南産「あきさかり」を使用した無洗米『オコメール』を講習会参加者や地元の幼稚園児等に配布した。

3 「あきさかり」専用一発肥料の効果確認

2年間の現地試験の結果、従来の分施肥系と収量・品質ともにほぼ同等の結果が得られたことから、2019年度から製品化となった。従来の一発肥料より窒素成分の割合を高めた(N:18%)こと

から施肥の省力化も期待できる。

4 荷受け時の異品種混入リスクの回避

当CEでは、普通作の「オオセト」、「ヒノヒカリ」を含め4品種の荷受けをしていたが、年により生育ステージが前後して、「コシヒカリ」と「あきたこまち」の同時荷受けをすることがあった。

しかし、今後は、成熟期が10日程度遅い品種特性により、同時荷受けが回避され、荷受け時間の短縮のほか、異品種混入のリスクの回避が見込まれる。



栽培講習会と無洗米「オコメール」

●今後の普及活動の課題

1 「あきたこまち」栽培管理からの脱却

「あきさかり」は分けつが多い品種で、従来の「あきたこまち」と同様の植付本数だと過剰分けつ・初数過多となり、粒張りが不十分となる恐れがある。また、同地域の昔ながらの慣習である「強めの水管理」についても粘り強い指導により意識を改革する必要がある。そこで、講習会での周知を徹底するほか、「あきさかり」の特性や栽培上の注意点をまとめた「あきさかり」栽培管理情報をJAを通して、適宜提供する予定である。

2 適期収穫の推進

試験栽培の結果から、成熟期予想の指標として出穂後の積算温度を1000℃に設定していたが、本格導入となった本年度は、出穂期以降の日照不足により、成熟が遅れ成熟期の判定が難しい年であった。今後、試験場やJA等と連携し、データを継続して収集するとともに、収穫適期の判定方法の精度を高めていく。

3 豊作の歓びの提供

近年、水稻の作付意欲の減退が顕著になっている中、多収性品種の導入により、豊作の歓びを喚起し、水田の有効活用と水稻の作付確保を進める。